文 献

- 1) 山田ほか; 整形外科 538, 21, 1970.
- 2) 吉川; " 757, 21, 1970.
- 3) 吉川; 災害外科 258, 12, 1969.
- 4) 夫児ほか; 臨整外 263, 1, 1966.
- 5) 真角ほか; 整形外科 508, 18, 1967.
- 6) H. Jesserer; Osteomazie
- 7) C. E. Dent; J. B. J. S 266, 34-B, 1952.

質 問

鹿 大 田 中 源 郎

1. 尿中カルシウム, 無機燐の定量値と VHD の投与との間に何らかの関連がみられるかどうか.
2. VHD の投与量をいかに決定されたか, VHD

中毒の予知はいかにしているか.

回 答

指宿温泉中央病院 松田 秀雄
原田 正孝

Vitamin D の大量投与により中毒症を起こすが, 血中 Ca が 11 mg/dl 以上に達すると中毒症を起こすと言われているので, 血中 Ca 定量をしながら漸次 Vitamin D の量を増加しなければならないが, 維持量は個々によって違うので一応中毒量までもっていつて Control すべきだと思う.

尿中 Ca, P は最初は測定しえなかったが, 最近測定することが出来たので, これらを測定しながら治療して行きたい.

副甲状腺機能亢進症と疑われる一例

熊本大学整形外科教室

伊 勢 紘 平・北 川 敏 夫
木 村 千 仞・忽 那 龍 雄
永 吉 康 祐

A Case Report: Possible Hyperparathyroidism

By

K. Ise, T. Kutuna, T. Kitagawa, C. Kimura,
Y. Nagayoshi

Dep. of Orth. Sur. Kumamoto Univ. med. School

Patient: 51 years old female.

Chief complaints are polyarthralgies and pathological fracture of right upper extremity.

Family history: non contributely.

Past history: duodenal ulcer, bronchial asthma.

Present history: She developed the pain and swelling of both hands, knees and elbows in Jan. 1971. At that time she noticed a loss of appetite and general weakness which were followed difficulty in walking and was hospitalized on Apr. 18, 1971. On that day she developed a pathological fracture in her right humerus and was transferred to our hospital.

On X-Ray examination, right upper extremity showed abnormal findings which were polycystic and localized osteolytic changes.

On biopsy from her tibia, it was revealed histologically to be like a hyperparathyroidism. There may be some doubt to diagnose definitely as laboratory and physical examinations did not reveal typical findings related to hyperparathyroidism, however, this is a interesting case could be diagnosed as hyperparathyroidism.

最近、我々は副甲状腺機能亢進症と疑われる一症例を経験したのでここに報告する。症例は51才の主婦で多関節痛及び病的骨折を主訴として来院した。家族歴に異常はない。既往歴に十二指腸潰瘍(35才)及び生来の気管支喘息がある。現病歴は昭和45年12月まで何らの愁訴なく日常生活に支障はなかった。昭和46年1月頃より両側の手関節、肘関節及び膝関節に疼痛を覚え、某医にてRAの診断のもとに通院治療を行なった。しかし次第に疼痛は増強し、昭和46年4月には両膝痛のため、歩行不能となり同年4月18日に某病院に入院した。同日、右上腕部がベットのカードに当たり骨折を来し、同部のレントゲン所見にて、多発性かつ限局性、嚢腫状の異常陰影がみられ、病的骨折が疑われ本年8月2日に熊大病院整形外科に転院し、各種の対症療法にもかかわらず、本年10月24日に死亡した。

入院時所見

(全身所見)

体格：小、栄養状態：貧、皮膚：やや乾燥、眼検結膜：慢性カタル性結膜炎有り、耳：慢性中耳炎、歯：総義歯(歯は5年前にすべて自然に抜けたとの事である。)肺：肺気腫有り。

(局所所見)

両上肢：骨折による変形が著明であり、運動痛あり、また上腕部は浮腫が著明である。

両下肢：筋萎縮が著明で、浮腫が足関節部より足尖までみられる。

両膝関節：著明な運動痛があり腫脹、熱感発赤などは認められない。

(レントゲン所見)(図1)

脊椎を除く全骨に多発性でありしかも限局性、嚢腫性の骨融解像を呈する。

(生化学的検査)

生化学的検査所見では血清Ca値は6.7 mEq/dlとやや高値を呈し無機燐は2.7 mg/dlとやや低値を示した。総蛋白量は5.7 g/dlでありAlの減少とγグロブリンの増加を呈した。血沈値は1時間値48, 2時間値75, 中等値43とやや亢進し、CRP反応++ RA反応++となっている。また尿中のCa値は0.7 mEq/dl, 無機燐は20 mg/dlとなっている。PSP値は15分値9.2%, 30分値5.3%, 45分値4.9%, 120分値は7.0%となっており明らかな腎障害を呈し

図1 副甲状腺機能亢進症と疑われる1例

図2 副甲状腺機能亢進症と疑われる一例

た。

(組織検査)(図2)

右脛骨部の組織生検を行なったところ、進行性の骨吸収と骨の線維組織化がみられ、また破骨細胞及び巨細胞がみられ汎発性線維性骨炎に類似した所見が得られた。

剖検所見

(肉眼所見)

長管骨はその骨髓は脂肪化し、レ線透過像を示した部分はその骨皮質の消失がみられた。胃及び十二指

図3 副甲状腺機能亢進症と疑われる一例

腸には多数のビラン面がみられた。腎は両側共に石灰沈着が著明であった(図3)。また副甲状腺腫は認められていない。

(顕微鏡所見)

現在病理学教室にて検索中であり詳細な結果は判明していない。

考 察

汎発性線維性骨炎は1891年レックリングハウゼンがその症例を報告して以来、比較的多くの症例が報告されている。その主なる症状としては、①骨変化、②腎障害、③消化性潰瘍、④肺炎、⑤易疲労性、⑥その他高Ca血症によるもの、などが挙げられている。

骨変化はフリーデンベルグ等は、①骨粗鬆症、②手指骨、鎖骨及び脛骨の骨膜下吸収像、③全身性または局所性の囊腫性変化、④関節周囲の石灰沈着像などが本症に特有な所見であると述べている。本例に於いては全身の骨に多発性、限局性で囊腫性の変化を呈したのみであり、関節周囲の石灰沈着像などはみられなかった。

腎障害については腎結石の問題がある。統計によるとコープ等によれば433例中56.8%に見られたと述べている。また腎結石は両側性で再発性の結石として現われる事が多いと述べられている事は注意を要するものと思われる。本例においては剖検により、両側性

に多数の小結石が認められた。

消化性潰瘍としては、統計によると大部分が十二指腸潰瘍であり、胃潰瘍は全体の1/5程度であると述べられている。本例に於いても十二指腸潰瘍の存在が指摘されており、また剖検により多数のビラン面が確認された。

その他高Ca血症による症状として嘔吐、下痢などの腹部症状があげられている。本例に於いても入院前及び入院期間中に嘔吐あるいは下痢あるいは便秘等、種々の腹部症状を呈した。

本症に特徴のあるCa、無機磷の変動については、①血液中のCa値の増加、無機磷値の低下、②尿中へのCa、及び無機磷の排泄増加、③%TRPの低下、④Ca急速負荷による尿中無機磷の増加及びCaに対する反応の欠如などがあげられている。本例に於いては①及び③の検査結果は陽性所見を呈したが、②及び④の検査結果は陽性所見を得られなかった。我々はこの事は高度の腎障害によるものと考えている。

結 語

以上のような検査所見ならびにレントゲン所見より我々は、1. 副甲状腺機能亢進症、2. アルブライト症候群、3. ページェット病、4. 多発性骨髄腫、5. 悪性腫瘍の骨転移等を考え、副甲状腺機能亢進症による骨変化を最も強く疑った。しかしながら本例においては、検査所見並びに臨床所見になお副甲状腺機能亢進症と断定するには問題があり、諸兄の御批判並びに御教示が頂ければ幸いである。なお剖検所見の詳細については現在検討中である。

質 問

鳥取大 前山 巖

腎障害から続発したものとお考えでしょうか。

回 答

熊大整形 伊勢 紘平

高度の腎障害より、続発性のものも考えている。なお詳細については剖検にて検討中であります。